平成29年度　学校評価総括

奈良県立大淀養護学校

教育目標	児童生徒一人一人の人格と人権を尊重し、障害の状態及び発達段階、生活実態を的確に捉え、「自分の思いや意見を伝え行動し、主体的に生きることができる児童生徒」を育てる。
運営方針	創意工夫を凝らした教育活動を展開する中で、一人一人の特性や能力に応じて社会参加・自立に必要な力を養い、健康で心豊かな児童生徒を育成する。
本年度学校スローガン	「元気なあいさつ、笑顔いっぱい、一人一人が輝く学校」

総合評価：B

平成28年度の成果と課題		本年度重点目標	具体的目標
年度当初より各学部主事や分掌部長と協議し、各学部及び各分掌において、取り組むべき課題を明確にすることや、分野によっては焦点化することで具体的で実効性のある学校運営をすすめられるように取り組んできた。このことについては、今年度も継続することと個々の教員においても学校運営の重点目標を意識しつつ具体的な目標を計画・実行できるようにすすめていきたい。若手教員の育成においては、ベテラン教員とのグルーピングを行いながら、無理のない範囲で課題の検討とコミュニケーションを図れるようにしたい。 地域との連携においては、今後も地域校への支援体制の構築や地域社会とのネットワークの広がりと強化を視野に取組をすすめていけるようにしたい。	1	一人一人のニーズに応じた効果的な指導を行うため、多角的な実態把握を行い、指導内容・指導方法の工夫と改善をすすめる。	・個別の教育支援計画をケース会議等で活用し、学校での関わりのポイントや合理的配慮についてなど、関係機関との共通理解を図る。 ・自立活動の指導において、障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服するため、児童生徒が主体的に取り組める具体的な目標を設定する。
	2	小、中、高のつながりを大切にするとともに、各学部の特色を明らかにする。	・高等部は産業科であることを踏まえ、各学部の教育課程の見直しと改善を図る。
	3	キャリア教育や進路指導の充実を図り、コミュニケーション力や望ましい職業観を育てる。	・一人一人に応じた、適切で円滑なコミュニケーション力を育てる。 ・担任、進路専任、保護者、本人等が連携し、課題に応じた進路学習や分かりやすい進路指導をすすめる。
	4	児童生徒が安心して学校生活をおくれるよう、安全の確保に努め、安全教育と防災教育の推進を図る。	・避難訓練、防災研修を実施するなどして、教職員の危機管理意識を高め、安全学習と安全指導を充実する。
	5	校内研修の活性化を図り、教職員の指導力と授業力の向上を図る。	・公開授業を企画し、校内外の教員で授業研究を行い、主体性を育む授業作りや授業改善をすすめる。 ・人材育成を図るため、校内研修の機会を計画的に展開する。（ハートOJT等）
	6	南部地域の特別支援教育のセンター的機能を果たすため、地域支援「つむぎ」を設置し、地域への効果的で適切な支援を行う。	・幼、小、中学校等の個々のニーズに応じた教育相談、訪問相談、研修企画等を行う。 ・校区内の教育委員会、就学指導委員会、幼・小・中学校等と連携を図り、一人一人のニーズに応じた就学相談・進学相談を推進する。
	7	各学部とも教育活動の場を地域へ広げるなど、地域とのつながりを大切にした取組を推進することで、豊かな社会性と人間性を育てる。	・社会体験学習や「交流及び共同学習」に計画的に取り組み、活動の充実と工夫を図る。 ・児童生徒・保護者・教職員の人権に対する思いを実現するための教育実践に努め、人権教育の理解と推進を図る。

評価項目	具体的目標	具体的方策・評価指標	自己評価結果			成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等
学習指導等（各学部）	児童生徒一人一人の実態に応じて指導内容・指導方法の工夫改善を行う。	【小】児童の学習における課題をその障害特性及び実態、また個に応じた発達検査から的確にとらえ指導に反映する。またその成果と反省を学級間で共通理解し次の課題設定につなげる。	A	A	B	【小】できるだけ年度早い時期に発達検査を実施し、学級内で報告をすることで指導に活かすことができた。検査結果の読み取りと課題設定の仕方についてより研修を重ねたい。	【小】発達検査の結果を指導に活かすために、研修を行い学部で共有できるようにする。
		【中】生徒の実態に応じて実生活に生かせるよう授業を工夫する。また、保護者に対して、授業のねらいや内容をより詳しく伝えるなど家庭との連携を図る。	A			【中】教師間で連携を行い生徒の実態に応じ、国語数学等多くの授業で般化に向けた工夫を行うことができた。また授業のねらい・内容を授業通信等を通じて保護者に伝えることができた。	【中】生徒の実態に応じて課題別のねらいを見直し、より適した課題設定を行ない、指導内容や方法に反映させる。
		【高】個々の実態に応じた発達検査をニーズに応じて実施する。検査結果から支援方法を工夫し個別の指導計画を見直す。また、学部全体で共通理解できるように学部研修などを行いながら取り組む。	B			【高】担任からの要請で検査を実施し、指導に生かすことができた。また支援方法について、保護者や利用の事業所とも連携できた。今後より多くの視点から検査ニーズを探る必要がある。	【高】検査結果を指導に生かすために、研修や実践を積み学部で共有する。検査未実施の生徒は、できるだけ検査を実施する。
	個別の指導計画、個別の教育支援計画の内容の充実とその効果的な運用を推進する。	【小】個別の教育支援計画における合理的配慮の研修を行い、児童が必要かつ適当な合理的配慮を受けることができるよう共通理解を図る。また個別の指導計画と個別の教育支援計画のつながりを意識して作成する。	B	B		【小】個別の教育支援計画への合理的配慮記入を行った。個々の記入にとどまり、学部で共通理解するには至っていない。	【小】学部内で合理的配慮について共有をし、実施に向けて改善を図る。個別の指導計画とのつながりについても意識できるように研鑽を深める。
		【中】学校生活において生徒個々に対して合理的配慮の提供を行えるよう研修を深め、生徒個々に対し適当な合理的配慮を提供できるように努める。	B			【中】個別の教育支援計画における合理的配慮について学級毎に話し合い、整理し、記入を行った。学部間で理解を深めるまでには至らなかったため、学びあう機会が必要である。	【中】個々の配慮を知り合い、学部で共有しながら、よりよい提供ができるように努める。
		【高】卒業後の生活を見据えた個別の指導計画を作成する。現場実習後は成果や課題をしっかりと捉えて、自立活動、教科の課題を見直しながら運用していく。また、個別の教育支援計画、個別の指導計画の内容を基に社会生活を送るうえで役立つ個別の移行支援計画を検討する。	B			【高】個別の教育支援計画への合理的配慮記入を進めた。また、進路先との連携を図る目的で個別の移行支援計画の改訂を行い、実施に至った。	【高】合理的配慮の実施、個別の指導計画の改訂、個別の移行支援計画の実施を受けて、さらに改善を検討する。
	地域とのつながりを大切にした教育活動を通して、児童生徒に豊かな人間性と社会性を育む。	【小】学校間や居住地との「交流及び共同学習」の更なる充実を図ると共に、児童が活き活きと交流するためにどのような力が必要か整理する。	B	B		【小】居住地校交流における個々のねらいの見直し及び評価を行った。共通理解を図り、より交流の充実を図れるようにしたい。	【小】個別の指導計画にねらいや評価を記入する。児童がより充実した交流及び共同学習を実施できるように、共通理解をする場を持つ。
		【中】地域で生きる力を養うために、地域とつながる学習を設定し、その機会に向けた事前事後学習の内容を工夫する。また、日常の生活指導や各授業など系統的に計画する。	B			【中】様々な場面で学んだ力をチャレンジタイムや現場体験学習・職場体験学習などで発揮させることができ、地域で生きる力につなげることができた。	【中】地域とつながる学習をより生徒の実態に合わせた内容となるよう学部内で話し合い、計画していく。
		【高】地域での理解や生徒の社会性を養う目的として、地域行事の参加を積極的に推進すると共に、地域の企業等との連携を図るためにも各教科で校外学習を検討する。また、学校間の「交流及び共同学習」の充実を図るよう、相手校と連携協同する。	A			【高】磯城野高校との交流及び共同学習でコラボ商品、美吉野園での音楽発表,メンテナンス校外作業など各教科で地域とのつながりを計画し、ねらいをもって実施することができた。	【高】社会性を養うとともに、卒業後の社会生活に必要な力をつけることをねらい、産業科の専門教科授業を中心に、各教科で地域とのつながりを図れるように計画をする。
教育課程（教務部）	小・中・高等部12年間の連携と本校の特色ある教育課程の編成をすすめる。	児童生徒の社会参加と自立の実現に向け、社会人として必要な力の育成と社会体験学習の充実を図れるよう教育課程の検証、検討を行い、次年度の編成に活かせるよう努める。	A		B	特別の教科　道徳が改訂され来年度の実施に向け、各学部のねらい等を見直し年間計画案を作成した。高等部ではより進路指導を重視した卒業後を見据えた教育課程に改編した。	新学習指導要領実施に向け教育課程を見直し検討する。高等部では、新たな教育課程を検証し、より良いものへと検討する。
		個別の教育支援計画をふまえた個別の指導計画の作成および活用方法の理解が深められるよう推進する。本校の個別の指導計画の位置づけを全職員が共通理解し、授業改善に活用できるツールになるよう学部会等で研修を重ねる。	B			個別の指導計画の中でも重要な自立活動の研修会を各学部で実施した。研修すべき項目は多々あり、今後も理解を深める機会が必要である。	個別の指導計画の作成の仕方や活用方法について、見直し活用する。
		3学部のつながりを大切にし、児童生徒が交流し共に学習する機会を積極的にすすめるとともに、研究部と連携して互いの学部を知り合う場を設定し教育課程の理解を深める。	B			研究部と連携してオープンクラスを実施し、互いの授業を知り合えたが、積極的な参加を促すことが課題である。	3学部のつながりを大切に、見て感じたことを伝え合う場や取組への共通理解を全職員に求める。
児童生徒指導（児童生徒指導部）	スクールバス利用の児童生徒及び単独通学生の通学状況の把握や安全指導を行う。	ア:全教員によるバス乗車（前期に）　イ:バス係による乗車（後期）　ウ:アイを受け、状況の把握を行い、全教員と共有する。	A	B	B	全面委託となる節目の年、教員の全員乗車等の策は有効であった。	来年度は、新着人教員の乗車と必要時の乗車で対応する。
		単独通学生の登下校の状況把握を担任等が定期的に行い、通学時の安全指導とともに緊急時の対応が迅速に行えるように備える。	B			単通生安全教室や担任の指導等で事故なく通学できている。	悪天候時や警報発表時の単通生の安全確保に向け、部内の体制の見直しと担任の役割の整理確認が必要。
	児童生徒会の方向性や持ち方を再確認し、児童生徒の自立を支援する。	生徒会役員の仕事内容の整理、活動時間の見直し等を行い、より豊かな活動を目指す。熊本県立松橋西支援学校との交流を計画的にすすめる。	A	B		役員の主体性を重視し、地域や交流校と連携を取りながら活動した。	仕事内容や活動の基本方針を明確にし、役員から全児童生徒、全職員に発信し、共通認識、協力態勢をとっていく。
		生徒会役員以外の児童生徒の活躍の場を柔軟な発想で生み出し、取組を展開する。	B			4つの専門委員会で各委員会及び個々に応じた内容で活動した。	中高の教員間で連携を取りながら各委員会の活動内容を検討、実施していく。

学校関係者評価及び改善方策

【学校運営等】
○特色ある学級編制や教育課程の検討を内部だけで行うのではなく、様々な研修会等で発表していくことで、他校の教員と意見交換をするなど、より広がりのある論議を行えるようにしてほしい。

○特別支援教育の理解をすすめていくにあたり、個々の教員の経験や専門性を言語化して若い教員に伝えていくことが大切である。

○新たな教科に対しては、教員間の連携を図れるようにしてほしい。高等部のファームやフードサービスの学習活動が地域へ広がることを期待する。

○教員の資質向上に向けた取組を推進してほしい。例えば、初任の教員には企業での研修などを取り入れることも方法ではないか。

評価項目	具体的目標	具体的方策・評価指標	自己評価結果			成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価及び改善方策
進路指導（進路指導部）	児童生徒に働く意欲や態度を身につけさせ、自立する力や進路決定につなげる。	高等部の担任、学年進路、進路専任のそれぞれの教員の役割をより明確にし、現場実習等に関する手続きやしくみを改善することで、実習を中心とした進路指導の充実を図る。	A	B	B	文書等を簡素化し、役割を明確にしたスムーズな現場実習の実施に取り組んだ。保護者との連携をさらに密にする必要がある。	現場実習を中心とした進路指導の方法や保護者との連携に関する情報の提供や研修を充実させる。	【進路指導】 ○今年度の高等部卒業生の進路指導において、当初の目的を概ね達成できたとのことであるが、保護者への基本的な事業所情報を確実に伝えていく必要があったという反省を今後に生かせてほしい。 ○国の制度変更や事業所の方向性をしっかり捉えながら進路指導をすることが大切である。 【センター校として】 ○地域校には、多様な支援や対応を求められる場合がある。特別支援学校の環境とは違った場での対応方法や学習面でのサポートなども新たな力量として備えていく必要がある。 ○地域の小学校から中学校への進学において、思春期の問題行動に対する理解や生徒指導と特別な支援を配慮する場合の認識など様々な課題が出てくる場合もある。引き継ぎやつながりをサポートすることも必要となってくる。 ○地域校の情報をしっかり捉えた対応をお願いしたい。 【その他】 ○大淀養護学校の指導力は、大変充実したものと感じている。今後も積み上げてきた伝統を大切にしながら、教育活動を行ってほしい。 ○教員の職場や業務に対する満足度を捉えて、働きやすい場になるよう努めてほしい。
		進路懇談等を通して、本人・保護者の願いをしっかりと把握して資料を作成することで、取り組むべき課題を明らかにし、生徒や保護者にとってより納得度の高い進路指導を行う。	B			懇談の時期や資料等を工夫し、本人・保護者の願いの把握に務めた。懇談への本人参画のあり方について検討が必要である。	願いや課題を確実に捉え、より本人主体の進路指導を行うために、懇談への本人の参加について検討する。	
		教員に対する事業所見学や情報提供を充実させるとともに、「進路指導の手引き」のさらなる活用を推進し、教員一人一人の知識と理解を深め、資質の向上を図る。	B			職員会議での情報提供を始め「進路指導の手引き」を個々の進路指導に関わって知識理解を深める機会を持った。	校内アンケートから活用実態を明らかにするとともに、より教員が主体的に活用できる情報提供と研修を設定していく。	
	関係諸機関や地域との連携を深めるとともに地域資源を最大限に活用する。	支援教育部と連携し、学校見学会の目的を明確にして実施する。地域別懇談会は具体的なテーマを設定し、地域からの参加者が意見交流しやすいように工夫した運営をする。	B	B		学校見学会の目的を明確にして実施した。支援教育部との連携によりスムーズな運営ができた。地域別懇談会では事前アンケート等を実施してニーズの把握に努めた。地域校の関係者や保護者のニーズに応じた事業の再構築の必要性を感じた。	地域別懇談会を廃止し、地域のニーズに合わせた事業の実施を計画する。懇談の対象、目的、実施方法などを支援教育部とともに検討しつつ、新しい名称の事業を計画する。	
センター的機能（支援教育部）	本校教員の特別支援教育に関する専門的な知識を高めていく。	・発達検査に関する専門的知識を獲得し的確なアセスメントを行って指導することができるように校内研修を行う。また、教育研究所主催のWISC－Ⅳの研修会に参加する。	B	B		必須検査の取り方、生かし方の研修を実施した。新版K式発達検査については外部から講師を招きアセスメントの研修を行った。支援教育部員でWISC-Ⅳの研修会に参加して検査の取り方や分析方法について学び外部からの検査依頼に対応した。	本校教員の専門性を高め的確にアセスメントしていくために、発達検査についての研修を実施する。必要に応じて外部の講師も依頼していく。また、外部で受けた研修等についても分掌部会等で報告し、共有していく。	
	センター校として特別支援教育に関する相談・情報提供等をすすめる。	・特別支援教育に関する地域からの相談依頼に対して『つむぎ』での訪問相談を実施し、ニーズにあった情報を的確に提供できるように関係分掌や関係機関などとも連携を図る。また、地域のニーズを探り、夏季休業中に地域の学校に於いて特別支援教育に関する研修会を実施する。	A			『つむぎ』を通して訪問での教育相談を推進した。訪問することで地域の課題や実情が見え、授業づくりや校内体制について一緒に考えることができた。また、若手の先生が増えたということを踏まえ、夏季休業中に地域の学校に於いて研修会を実施した。	児童・生徒の様子を実際に見てほしいとのニーズが高い。実情を把握し、インクルーシブ教育としての授業づくり、障害特性の理解などを伝えていくために来年度も訪問相談を実施していく。	
	適正な就学・進学と支援を推進する。	地域の幼・保・小・中学校の特別支援担当教員に向けて本校の説明会を実施する。また、より正確に幼児・児童・生徒の実態を把握し、適正な就学・進学をすすめられるよう、保護者との個別面談・体験学習などを早い段階で実施する。	B			説明会や就学指導委員会を通して教育相談につながるケースもあり、地域と連携して進められるようになってきた。本校に就学する幼児が初めて在園する園には常に働きかける必要があった。	地域によって就学先についての意識に差があるので、説明会や教育相談、体験学習の周知を図る。各教育委員会とも密に連携を取り、早い時期から丁寧に実態把握していく。	
研究・研修（研究部）	学部間の連携を深め、12年間の本校教育の目指すべき方向や在り方を探求する。	学校統一テーマ「12年間を『つなげる』指導・支援を目指して」のもと、今年度は「深める・つなげる」ことを柱とする。性教育をテーマに各学部が連携しながら「12年間のつながり」について研究活動を推進していく。また今年度も全体での研究の日を設定し、情報交換できる機会を設定する。	B	B		各学部での性教育のねらい、小中高のつながりをもった年間指導計画の作成を目指し「こころとからだプロジェクト」を発足させてより系統立てて深めていくことができた。全体の研究の日では夏期講師研修を受けて全学部で情報交換することができた。	来年度は「発信する」を柱とし、今年度の研究活動を深め発展させる。「こころとからだプロジェクト」を継続し、性教育に関わる教材研究や授業研究等を、学部間の連携を図りながら推進する。また、様々なツールでの発信も行う。	
	指導力と専門性の向上を図るため、より実践に直結していけるような研修の充実を図る。	10／25、11／22に公開授業を設定し、外部に公開するとともに校内の教員も参観できる体制をとる。公開授業の内容については研究テーマに沿った内容とする。研究協議は外部より助言者を依頼し、授業改善に向けて深められるようにする。	A			外部より10名の参加。特別時間割を設定し、授業を「性教育」で統一したことで校内の教員も研究テーマとリンクさせ目的意識を持って参観することができた。	学部の実情に応じながら学校統一テーマに沿って授業研究を実施できるように計画する。より充実した授業研究になるように研究討議の方法等も合わせて再度検討。	
		他学部を知り合うために教務と連携しながら、公開授業月間を計画的に実施する。	A			オープンクラスと名称決定。教務部と連携しながら実施できた。しかし実施が3学期になり、より円滑な準備と実施が今後の課題。	今年度の実施状況や実施後の反省をもとに教務部と検討する機会を持ち、来年度の方向性を決定する。	
	人権教育の実践と研修の充実を図る。	毎月11日（人権を確かめ合う日）の職員朝礼で人権標語を発表したり、各種の人権に対する研修を紹介し参加を呼びかけたり、校内外の人権に関わる問題事象を分掌、学部等で紹介したりする等、職員の人権意識を高めるための活動を行う（子どもへの言葉かけの改善等）。	B			人権標語を意味も含めて毎月発表、掲示を行った。また職員に対しての資料の回覧と共に人権に関わる研修の一覧表を作成し参加を呼びかけたが、参加教員は少ない状態が続いている。	人権標語を、さらに生徒に意識させるために掲示場所を増やす（各学級など）。研修案内のさらなる呼びかけ。	
健康教育（保健体育部）	児童生徒の健康・安全に関する校内の体制を強化する。	授業・給食・行事等、一年を通じて食の安全性を向上するため、学校における食物アレルギー対策のマニュアルを整備する。	B	B	B	対策マニュアルをよりわかりやすく整備したが、一年を通じての活用までには至っていない。校外での飲食に関してが課題。	該当者の学校生活に密着させるため、より細やかな働きかけを行う。校外の飲食についてのマニュアル作成を行う。	
		児童生徒の感染症対策・食物アレルギー・緊急体制・安全管理等について教職員の技能・意識の定着を図る。	B			職員朝礼やほけんだよりで新しい情報を伝えることや、保護者から得た情報を共有することに努めた。	ヒヤリハットや事故につながる事象がみられた。日常のチェックを行うと共に定期的に該当担任に確認する。	
	円滑な行事運営と安全に関する環境整備を行う。	運動会において、児童・生徒席及び保護者席の整備をすすめるなど、安全に対する取り組みを充実させ、児童生徒が安心・安定して活動できる環境を整える。	A	B		進入禁止エリアやゆずりあいスペースの設置などの環境を整え、児童・生徒が集中して、また、安全に運動会に参加できた。	敷地内喫煙や赤リボン・名札の不着用者への対応に関して、確認体制を整える。	
		プール施設・設備に関わる安全に対する取り組みを充実させ、事故を未然に防ぐ。	C			プールに関し安全面は授業者へ周知・確認し事故防止できた。施設管理面はチェック体制不十分のため問題事象が発生した。	新たな管理マニュアルを作成しチェック体制を強化する。	
情報教育（情報教育部）	校内の情報化を推進するとともに、教職員のICT活用に関するスキルアップを目指す。	校内の情報化を推進するため、ネットワーク環境の保守・充実に努める。また、新リース機材のセットアップ及びリースアップ機材の活用をすすめ、教職員が校務や指導に活かせるようにする。	B	B	B	4月当初のリース更新に合わせ、教員が使用できる機材(リースアップ機材ではあるが)の増加を行うことができた。	一人一台の充足に向けて、今後取れる対応を模索していく。旧機材については故障に対する保守は欠かせない。	
		office365のアカウント普及をすすめるとともに、情報教育部内で活用し、現況や具体的な活用方法を発信していく。	A			新着任者研修、夏期の校内研修、外部の案内などに取り組めた。アカウント未取得の全ての方に取得講習を実施した。	アカウントの有効利用に向けての講習機会の案内や研修も含めて実施する必要がある。	
	情報の管理を徹底し、データの保存方法や規約について再検討する。	他校と連携及び協議を行い、情報管理の規約の見直しを行う。校務系フォルダへのデータ保存やonedriveの使用に関してのルールを作成し、保存方法を検討する。また、児童生徒の個人情報の保護に努める。	A			現規約の見直しやonedriveのルール作りの研修を進めた。年度明けを追加規約の施行に向けて提案できた。校内サーバー内のデータの整理や圧縮等の協力をお願いし実施できた。	規約に沿ったonedriveの有効利用の進める研修機会をもつことと個人情報保護の徹底に向けて今後も務める。さらに活用できるよう校務系及び教育系ネットワークのインフラ整備も進める。	
	情報発信の場として学校HPを定期的に更新し、充実を図る。	現在のHPの内容を充実させながら、1年間かけてCMS移行への基盤を作る。まずは情報教育部内で操作研修を行った後、必要な学部・分掌で研修を行い、誰もが情報発信しやすい環境を整える。	B			部内で新HPに向けての研修と整備を進められた。次年度公開に向けて仕上げるところまでできた。部内研修の中で他分掌教員への研修のあり方など発信しやすい環境づくりを確認した。	新年度HPの更新へかかわる職員の増加に向けて見通しをもって計画的な研修を進める。発信すべき情報、発信してはいけない情報の整理、研修もさらに取組む必要がある。	
文化的行事（文化部）	行事や作品出展を通して、一人ひとりの児童生徒が輝ける場や機会を作るとともに、地域や保護者との連携を図る。	各行事が滞りなくスムーズに開催できるように、各学部や関係部署との連携を図る。また、安全面での配慮を徹底する。一人ひとりの児童生徒が活躍し、達成感を味わうことのできる行事になるように努める。各行事を通して、本校の教育活動の理解啓発に努める。	A	B		ふれあいまつりでは使用できる学校施設に制限があったが、開催の仕方を管理職と相談しながら最善の方法を考え、各学部および各分掌の協力の下、安全に実施することができた。	各行事のアンケートをもとに部内で反省した事項を次年度へ引き継ぐことで、よりスムーズな運営を心がけ、安全面の配慮を徹底する。	
		文化鑑賞会は、児童生徒が楽しみながら文化や芸術に触れることができるようにする。また、演劇や音楽、伝統芸能等、様々な文化に触れることができるように企画する。	B			文化鑑賞会は、human noteによるゴスペルコンサートを実施した。児童生徒が音楽に乗って楽しむ様子が見られた。	来年度は「おもしろ民族楽器」の演奏会を予定している。児童生徒が楽しめる内容になるよう、綿密な打合せを行う。	
		特別支援学校アート展や県障害者作品展への作品出展、ふれあいまつり、学習発表会等での発表活動を通して、本校の取組を地域や保護者に発信していく。また、作品が展示されたり、受賞したり、賞賛を受けたりする経験を通して、自己肯定感を高め、さらなる意欲につなげられるようにする。	B			国文祭・障文祭なら大会が開催され、特別支援学校アート展や県作品展の開催時期等に例年と異なる点があったが、事務局や県内他校と連携しながら対応することができた。	引き続き作品出展を通して本校の取組や児童生徒のよさを発信していくと共に、児童生徒が達成感を感じる機会としていく。	
防災教育（総務部）	安全な環境づくりに向け、安全教育の推進に努める。	体制整備として、避難経路の見直しや点検を行う。地震避難学習として非常持出袋の点検を行い、各学級で活用方法の指導に取り組む。	B	B		年間計画の中で昨年度の反省も踏まえて役割分担の意識を高めることができた。各クラスで非常持出袋の中味の確認をして防災についてに触れた。	非常持出袋の活用方法が各学部で違いが出てきたので、確認をして今後の指導に生かしていく。	
	児童・生徒の安全を第一に行動できるように徹底する。	災害時のマニュアル「スクールバス運行中に地震がおこった場合について」では、安全地帯の確認等を整え、他分掌との連携も図りながら完成させる。年度末には保護者に配布できるよう取り組む。	B			スクールバスにも最終確認をして生徒指導部と連携を取って、時刻表に記することの確認を取り進めていくことができた。	30年度避難訓練の計画を3回にする予定であるので、研修も含めて内容についても吟味する。	